

## 奥村 綱雄

昨年九月十四日のことであつた。奥村さんは、ひょっこり大蔵省の私の部屋に現われた。すでに不治の病に冒されているのを知っていた私は、一瞬ぎくりとする思ひであつた。私の驚愕をよそに、当の奥村さんは、自分の病はもうすっかり恢復し、喉に若干の後遺症を残すのみであるといわれるのだつた。その態度は、屈託がなく飄々として、清朗であつた。

用件の内容は、運輸審議会においてかねてから考えている交通政策と取り組んでみたい。ついでには運輸大臣にわたりをつけて、自分を審議会委員に推すよつにといわれるのであつた。私は、奥村さんの健康状態からいつて無理だと知りつつも、真剣に対応し、いささかもつつるな感じを奥村さんに与えないよつに心懸けた。幸い佐々木秀世運輸大臣の配慮で、奥村さんの希望は叶えられた。私は奥村さんにせめてものはなむけができたことに満足している。

懇話を終えた後、奥村さんは、一步一步しっかり大地を踏みしめるよつに歩を進めながら、私

の部屋を出ていかれた。その後ろ姿は、今なお私の眼底に焼きついている。それから約二カ月後の十一月七日、私は奥村さんの計報に接したのである。奇蹟は、遂に起こらなかつたのである。

奥村さんの一生は、波瀾に富み、多彩でかつ雄大でさえあつた。戦後の混乱期に、若くして野村証券の社長に推され、三十四年からは会長として、その磐石の基礎を築かれた。会長になられたからは、むしろ国内外の証券界、金融界との交流に挺身され、わが国の産業金融の興隆に尽くれることが多かつた。

奥村さんにとつては、一つの嶺をきわむれば、次にまた挑むべき嶺があつた。その嶺を踏破すれば、さらに峨々たる山頂が彼方に控えていたように、席温まる暇もない活躍振りであつた。しかも、周囲の人々からは、親まれ、愛され、敬慕された。あの瀾大な笑いと澄んだ瞳は、その人柄そのままであつた。たんに事業の鬼才であつたばかりではなく、人の世の哀歎を広く、深く、かつこまやかに味わひ抜いた人であつた。柳暗の巷での艶名も人並み以上であつたが、少しのいや味も後ろ暗さもなかつた。ボーイ・スカウト連盟理事長として、その制服で身を固めた姿は、まことに欲のない愛すべきその人柄を象徴していたようである。電子情報処理振興審議会の会長として、また、海外移住審議会等の委員としても、産業金融界におけると同様、多くの貢献をされた。

## 6. 追慕塔

私たちは、常に自らの生ばかりでなく、その死も美しいものでありたいと希求している。そういう美に対する敬仰と憧憬の精神こそが、暗い濁いた世の中を明るくし、潤いをもたらす原動力であるように思う。

思えば奥村さんの生と死は、美しく秀れたものであり、それ自体、立派に完結した芸術であったように思われてならない。生前のご恩顧を謝し、ご遺徳の数々を追慕しつつ、改めて敬慕の念を深くするものである。

(昭、四八・二一・七発行『追悼奥村綱雄』所収)